八王子盲学校だより

令和８年１月発行　第９号

東京都立八王子盲学校長　田島　由紀子

New Year's Resolution

校長　田島　由紀子

新しい年が始まりました。幼児児童生徒の皆さんは「New Year's resolution(新年の抱負)」を考えましたか？これは、イギリスやアメリカで広く行われている習慣で、「今年はこうしよう！」という自分への目標や希望を新年に決めることです。

イギリスの小説『Bridget Jones's Diary』(ブリジット・ジョーンズの日記)は、そんな習慣をユーモラスに描いた作品です。日記形式で綴られる物語には、恋愛や仕事、ダイエットなど、誰もが共感できる悩みや目標が並びます。主人公のブリジットは、新年になると手帳を開き、「もっと運動する」「食べすぎない」「ポジティブに生きる」などの New Year's resolution を書き込みます。しかし、その後の物語では、思うようにいかないことが多いのです。ダイエットを決意した翌日にたくさん食べてしまったり、仕事や恋愛でドタバタしたり…。しかし、失敗にめげず、次に挑戦するブリジットの姿がとてもチャーミングで、読んでいて思わず笑顔になります。

この作品は 2001 年に映画化されて人気を博し、続編も3作制作されました。失敗しながらも前向きに生きるブリジットの姿が描かれ、原作同様に共感と笑いを誘います。私はこの本の日本語版を読んでいるうちに「原書で読んでみたい！」という気持ちが湧き、人生で初めて英語のペーパーバックを買いました。その本は今も本棚にあります。実はまだ最後まで読み通してはいないのですが・・・いつか読み切るつもりでとってあります。本棚で出番を待っているそのペーパーバックを見るたびに、「今年こそ！」と心の中でつぶやいています。ページをめくるたびに、ブリジットのユーモラスで前向きな姿に元気をもらえるようです。

大切なのは、完璧であることではなく、挑戦し続けること。失敗しても、笑って次に進めばいいのです。皆さんも、今年は「新しいことに挑戦する」抱負を考えてみませんか？ブリジットに倣って手帳やノートに書いてみるのもおすすめです。挑戦は勇気がいりますが、その一歩が未来を変えます。

さて、3学期は学年のまとめの時期。そして、進路を考える人もいます。進路を選ぶとき、「失敗しない安全な道」だけが正解ではありません。自分で選んだ道を、自分の力で切り拓くことこそが、どんな困難にも負けない力になります。迷ったときは、「まだ成長している途中」と思って、前向きに生きましょう。「 Keep trying! （挑戦し続けよう！） 」

保護者・地域の皆様へ

新年あけましておめでとうございます。旧年中は本校の教育活動に多大なる御理解と御協力を賜り、心より感謝申し上げます。子どもたちが安心して学び、挑戦できる環境は、皆様の温かい支えによって成り立っています。

本年も、幼児児童生徒一人ひとりの可能性を信じ、教職員一同、力を合わせて教育活動に取り組んでまいります。どうぞ引き続き御支援・御協力をお願い申し上げます。皆様にとって、笑顔と希望に満ちた一年となりますよう心よりお祈り申し上げます。

本校の歴史について

理療科（非常勤） 齊藤 博

私は 1956（昭和 31）年に生まれ、先天性の視覚障害のため八盲小学部を卒業しました。中学から母校を離れましたが、1990（平成2）年度に教員として着任し、現在まで 36 年間勤務しています。今では校内で「一番年寄り」になり、同窓会長もさせていただいていることから、今回このテーマで書かせていただくことになりました。

八盲は、1930（昭和5）年に創立しましたが、なぜ八王子市にできたのかについては、周年記念誌などでもあまり多くは触れられていません。

八王子には、有史以前の時代から人々が暮らし始め、多くの神社や城が作られ、江戸幕府は八王子を直轄領として重視していました。甲州街道沿いには宿場ができて発展し、現在の基礎となったようです。幕末から明治時代には絹織物業で大いに栄え、あん摩業者も多く、盲児は徒弟として親方から技術を学び職業にしていたようです。このように、八王子は町としても大きく、盲人も多かったという下地があったと考えられます。

そして、昭和になって将来に不安を感じたあん摩業者の親方たちが「技術講習所を作って欲しい」と武藤文吾八王子市長に要望しました。市長の指示を受けた社会事業協会の淵江源治氏は、視覚障害児にも教育が必要だとし、講習所ではなく盲学校を設置することになり、文部省から認可を得ることができたようです。そして、武藤市長が校長を兼任することとなり、上野町の商業公民学校の校舎を借りて八王子盲学校が誕生したのです。この時、親方たちはあん摩業の講習所ができなかったことで大変がっかりしたようですが、視覚障害児にとっては初めて教育を受ける場ができたという活気的なことでした。小学校1学級で 23 名、ほとんどが年長者で授業を受けたこともなかったので、喧嘩が絶えず、浪曲や歌謡曲が飛び交う騒々しさだったそうです。

1936（昭和11）年に全盲実業家の立川吉五郎氏から敷地の一部と建築費が寄付され、1937（昭和12）年6月に現在の台町に新校舎ができて移転しました。学級増や中等部あん摩科などの設置も進んでいきましたが、戦争に突入して 1945（昭和 20）年8月2日の八王子大空襲で外来実習室を残して全焼してしまいました。終戦後の9月から、この実習室で授業を再開し、いろいろな苦難を乗り越えて、1950（昭和 25）年に東京都に移管され、現在の都立八王子盲学校になりました。

その後、校舎や寄宿舎の増築が進み、1960（昭和 35）年には小・中学部に特別学級が設置され、10 月には創立 30 周年、都立移管 10 周年の式典・祝賀会が盛大に行われたようです。この間、1945（昭和 20）年に立川吉五郎氏の、1955（昭和 30）年に開校当時から教鞭をとられ、第3代校長として貢献された深沢洋治郎先生の頌徳碑が校庭に建立されました。（老朽化などで昨年の引っ越しによって廃棄されたことは残念です。）

このころには、生徒会や部活動も活発に行われるようになり、特に一般高校の弁論大会では本校生徒が3年連続優勝したと聞いています。私が小学部で生活した 1960（昭和 40）年代は、盲学校の全盛期で全校生徒は常に 150 名以上で運動会や文化祭がすごい熱気だったことや、全国盲学校野球（グラウンドソフトボール）大会の応援で富士森グラウンドに応援に行ったことなどを今でも覚えています。

1960（昭和 40）年代後半から 1970（昭和 50）年代にかけて、校舎の改築が行われ、昨年解体した前の校舎が完成しました。そして、1971（昭和 46）年に幼稚部、1973（昭和 48）年に高等部普通科の設置、1976（昭和 51）年に専攻科理療科の認定、1978（昭和 53）年に高等部保健理療科、1990（平成2）年に専攻科保健理療科の設置が行われ、現在の教育課程が整いました。

今回は、本校の歴史のうち、特に昭和の部分について書いてみました。多くの先生方や児童・生徒の皆さんは、まだ生まれていなかった頃のことです。これを読んで、もし興味を抱いたら、その後の八盲の歴史について周年記念誌などを読んで調べてみてください。